

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱認許第三五二號
昭和二十五年四月五日發行

第十六卷

第四號

浄土

四月號

悟る心悟らぬ心

吉田絃二郎

佛道身邊

山本空外

明日は花まつり

高橋良和

本願は法爾の道理

佐藤賢順

1950

4

緑を大地に

四月八日は花祭り、お釋迦さまの誕生を祝う日、三千年の歴史を通して、世々の光となつてきた佛教を更に心にふかめる日しかし道は人によつて弘まる。眞劍に道を求め道を弘める人々の絶えざる力が佛教を今に生かして來た。

春とは言ふものゝ、人の世にはまだきびしい冬が漂つてゐる。美しく豊かな、と言われた日本の自然の風光もまだ恢復してはいない。山林の亂伐は年々の洪水の被害をもたらし、戦火にたゞれた街をつゝむ緑のやわらかさも乏しい。自然を愛護する心は忘れられている。

緑の週間、國土緑化運動が始まつてゐる。一は荒れた自然の風光を恢復する。二には人々の心に温いものを蘇らせてくれる。しかし之は一朝にして成るものではない。年々の努力と忍耐とが、やがて將來をゆたかにする。

昔或る時、臨濟——有名な禪僧——が山寺の門前に松の苗木を植えていた。これを見た或る僧が、「いまさら老年で松苗を植えるまでもなかるう。殊にこゝは深山の中ではないか」と尋ねた。

一には山門の風致を作り、二には後人の道しるべにもなるう。

臨濟はこう答えると黙々と大地を掘つた。彼は遠く將來の道を考へてゐた。緑の週間の心もまた斯くありたい。(藤田寛雅)

目次

本願は法爾の道理……………佐藤賢順(5)

明日は花まつり(童話)……………高橋良和(12)

佛道身邊……………山本空外(1)

悟る心悟らぬ心……………吉田絃二郎(9)

祐天上人の話……………藤田寛雅(18)

祝福の人生……………早見君子(16)

日常勤行講讀(四)……………大野法道(22)

芝園だより

佛道身邊

文學博士 山 本 空 外

終戦を轉機に二十年來の大學教授生活から出家して、ひたすらに法然上人の跡を慕ひ、その教學實踐の道に入つてよりもはや四星霜を過ぐる半ばになる。昭和二十年八月終戦で九月の初め上洛し、その日直ぐ知恩院で得度したのであつて、その時の貌下の墨蹟が今も私の用ひてゐる威儀細の裏に當時を物語つてゐる。自から佛道に入つて生き甲斐を全うしうるゆゑんを辨へえて、念佛生活の身の上になつたのはすでに三十年の昔に遡り、それ以後念佛生活の上に學業を進めて來たものではあつたが、終戦までで一生を終へたとして、終戦直後從來の俗生活から新たな僧生活に入つて餘生を全うしたいと考へたのである。ここに餘生を全うするといふ意味には色々あるが今はそのうちの一二に言及する。

脚下照顧しなければ、いはゆる賽河原で石を積むにも

似たやうな世間の仕事に没頭もできるであらうが、しかし深く思ひをめぐらすと畢竟するに世間虛假唯佛是真の古語が眞理を訴へてゐるやうに考へられる。理論を知れば原子爆彈などの造れる知力もえられるし、人の是非も批判できる見識をもつこともできるであらう。そのうへ勇氣があれば社會革命も絶叫しうる。かうしたもので世の中は相當活氣を呈してはゐるが、しかしはたして眞實の幸福がその割に世界を潤してゆきつつあるであらうか。功罪半ばするといひたいが、むしろ餘計なことだろうが多いやうである。個人の生活からして世界の政治にいたるまで、眞實なることの餘りに少いのに驚き、かへつて政治を語らないでも眞實の政治の道は開け、革命を叫ばないでも眞實の革命の道が通ずるところに私は佛道を見出さずにはゐられない。自分の心の中をさらけ出し

て人事に考へてみたら、自分でも非難せずにはゐられぬやうな程度なのに、人前では堂々と論ずることもある。

人に説くは易く、みづからに行ふは難い。その難は顧みず、衝動のままに、たがひに競争相手になつて名利を追ふに急なること個人間も國際間も變りなく、しかも紙上に大書されるごとき事件までもよく考へてみれば兒戯に類すること少からず、そこに目覺めて生活の眞實に徹せんとするところに佛道があるわけである。

宗教のうちには詮じつめると病氣治療が主になるやうな關係上、いはば醫學部に屬するごときものもあるし、功利を説くに急な關係上商業學部に入るときものもあるし、政治に利用されて政治學部に加へられるごときものもあるし、大半は音樂であるところから音樂部に歸するごときものもあつて、その他多種多様であるが、總じてかうしたいはゆる社會性は佛道にいそしむものの眞面目とは趣きを異にするといはねばならぬ。宗教でなくともできるやうな方面は一切これを實社會にゆだねて、佛とは目覺めるといふ字義であつてみれば、釋尊が成道直後初轉法輪の際に「不死の鼓をうつ」といつたその不死に目覺めることを主體としなければ佛道とはいへないしまた淨土の成り立ちやうもないやうに思はれる。

かく目覺めあへる社會的喜びをほかにしては淨土は實感できぬ。まさにこのみ法こそ世界の光明となりうるものである。

僧の生活に入つてからは文字通り家を出て、おそらくこれ以上の小菴はあるまいと思はれるやうな小寺に住して、境内のまはりを晴耕もするが、また一室に雨讀もし、しかし朝夕佛前の讀經と念佛の一時はわけても感涙禁じ難いほどに古徳を偲ぶとともに、古徳を先輩として跡を追ひうる身の幸せを感じずにゐられない。尤も終日何をするにも念佛三昧の日暮らしではある。もとより紙上に眼を向けるときには、まるで兒戯のはうがましなぐらゐの出來事に世間が騒ぎ續けてゐるのを見ては、社會が世間虚假を唯佛是眞へと前進するやう願はずにはゐられぬが、といつてかへつてその騒ぎの風をあふることになつてはならぬから、いきりたつ喧嘩相手になることだけは戒しめて、ものはいはねど朝起きてあたり一面銀世界に心をうつやうな夜半の雪の仕事にも似た道に精進してゐる。佛道の社會性はそこらにあると私は思ふ。

さうした佛道をみづから學びながら、また縁にまかせて人にも傳へうる身の上を喜ばずにはゐられない。たとひ世界國家が成立したと假定してその主權者になつたと

ところで、その事自身に大した價值があるとも考へられぬとすれば、いはんやそれにも及ばぬ小事に顔色變へて争ひあふことは、生命がいくつもあれば別として、一つしかない生命をそれにあてがつたのでは、何としても生き甲斐ある生活とは考へられえない。處刑に直面してはじめて生の本義を反省した戦犯者も少くなかつたやうであるが、さすれば一般の方々が生の本義に徹せずにはば夢死してゆくことの多いのも怪しむにたらぬ。しかしすでに釋尊出でて佛道を提唱して今日にいたつたからには死の直前にいたつて、生き甲斐の徹しなかつた一生と、悔ひることのないやうな生活をして各自の道をそれぞれ價值づけたいものである。

しかし人中の分陀利華は少くはない。この出雲の奥の小菴にさへ入り代り立ち代り遠近からの求道者跡を絶たぬ。中には切實に人生の悩みを訴へて、まさに芝居にすれば作り事としか思はれぬほどの苦に耐へ來つた人ありその一人を相手に終日法を説けばやがて歡喜して法悦面に窺はれるあり、また時には數多の聞法者相會してそれに迎へられることあり、また時には一族親子相集つて老若皆佛道に親しまんとする家庭に招かれて一夜を過すかと思へば、數旬もうち續いて善男善女への法話に寸時の

餘暇なきこともある。しかしこの冬など雪に埋れてずつと佛書に親しみえた。萬事縁有ればそれにまかせてのとである。

説いて説かれ、教へて教へられもする。その間人に感じ物に感じて佛道の極致に直參して相對を絶する實地に目覺めること一再ならず、けだし南無阿彌陀佛とは絶えずこれを稱へながら生活してゆくのであるから、日々の社會事件を受け取つてゆく入れ物のごときものであらうか。世のなかの出來事を功利の鏡にうつして受け取つてゆくやうな生活態度ではそこに生ずる相對的な喜怒哀樂のうちにやがて生命の火が消えいるごとき生涯にほかならぬが、それではいかに喜樂が比較的多い生涯といへども人生の幸福を基礎づけえない。ましてや怒哀のまさる生涯においてをや。世間の出來事を受け取つてゆく入れ物として功利の鏡にうつしてゆくだけでなしに、萬事を南無阿彌陀佛で受け取つてゆきもするところに、この念佛三昧の生活を照す光はいはば底から來るので、先の喜怒哀樂のやうに影のごとく伴ふものではない。かうした意味で、單に天分のままや一般の學校教育や社會生活などではどんなに成績がよくてもまた成功しても到底達成できぬ生活目標の自覺に誰もが心を向けねば、幸福も社

會淨化も成り立ちやうがないその根本的態度が南無阿彌陀佛にほかならぬ。

南無阿彌陀佛とは印度の言葉の音を傳へてみるだけでその意味を知りさへすれば縁起の悪いものでもなければ葬式法事の用語といふわけでないことは自明である。ただ死の問題は人生の重大事であり、さうして生きてゐる年から何よりも確かに、死後も變ることなき生の根本に目覺める生活態度が南無阿彌陀佛であるだけに、日常生活一切にはもとよりのこと、死、死後の問題にも直結されてゆくまでのことである。ここで南無阿彌陀佛といふやうな深い意味と長い洗鍊された傳統をもつ言葉を簡単に説明しえないが、したがつてそれについてはそれだけを別稿としてお述べする必要があるが、ともかく人間が生れついた生活本能のままに、たがひに競争相手になつて世のなかの出來事を損得の鏡にうつして受けとつて喜怒哀樂のうちに一生を過してしまふやうないはば平面的な生活態度にとどまらず、さらに何事も人生の眞實に徹する辨への通路になるやうな受け取り方としていはば立體的な生活態度が南無阿彌陀佛なのである。かくして人生萬事を南無阿彌陀佛で受け取つてゆけるやうに萬人に提唱したのが法然上人の淨土教學なのであつて、朝野

をあげて決河の勢ひをもつて全國に普及し、當時全く世界宗教史上空前の傳道の實を示したゆえんのものは、今日のわれわれとしてもその眞實を把握すれば、これこそ全世界に人類の眞實の寶として訴へるべきものなることを認識せざるをえないであらう。

世界各地に今日ほど宗教の論ぜられてゐることおそらく史上嘗てない程である。しかし宗教思想のみ活潑で、肝心の宗教は見出し難い。今日の世界が切實に要請してゐるのは宗教思想ではなくして宗教である。宗教はどこまでも實地であつて、論議される蔭のやうなものではない。長年血の滲むやうな實踐の底から、南無阿彌陀佛を稱へずにはゐられぬ生活態度そのものをほかにして論議されるものではない。みづからその生活態度に徹せずにはゐられぬ辨へにおたがひがなつてゆくところに淨土の面目がある。法然教學は全人類をいはば淨土という學校に新入させるゆえんを説いたものにほかならぬ。まことに世の中は淨まるどころか、いつまでたつても泥仕合が際限ない。文化とか自由とかいへもしないし、聞くのもなさないやうな氣がする。おたがいがほんとうに生きるねうちのあるやうな生き方に徹しえて淨められる世の中すなはち淨土を目標とする生活に目覺めるのには、法然上人が淨土宗を開創された本義を全人類に新に傳へる必要があらう。

本願は法爾の道理

法然上人
法語私釋

(三)

——炎は空にのぼり水は下りさまに流る——

自然なる
自然なる

自然なるも自然なるも自然なるも自然なるも自然なるも自然なるも

佐藤賢順

法爾の道理という事あり。炎は空にのぼり、水は下りさまに流る。菓子の中に酸き物あり。甘き物ありこれはみな法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は、名號をもて罪惡の衆生を導かんと誓ひ給いたれば、ただひたすらに念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にて疑いなし。(勅修御傳卷第二十一)

(5)

これは上人が常に仰せられた御言葉の一つであります。法爾の道理とは自然法爾(じねんほうに)などと熟字して本來のありのままの事、當り前の理由というのであります。火が下から上へ燃え上り、水が上から下り流れ、菓物の中に梅や杏のように酸っぱいものがあり、無花果や柿のように甘いものがあり、春は花が咲き鳥が歌い、秋は稻穂が黄金色に波打ち木々の葉が紅葉する。これは當り前のことでありますし、ありのままの姿であります。それと同じく佛の本願もまた、ありのままの道理で當り前の事であるというのであります。

今回はいよいよ浄土教での一番重要な課題である佛の本願についてお話しなければなりません、本願は本誓願とも本誓の重願とも言ひ、また大願業力とも言つて、佛の誓ひ約束、救ひの力、導きの働きであります。佛が刻々に、生きた力、救ひの力として一切の衆生を導いて、いや、一切の衆生だけではない、禽獸、蟲鳥、草木、國土の全世界を導いて、苦悶や困乏から救ひ、安穩と平和の世界に至らせようとする働きであります。本願とは佛と衆生との最も親密な結びつき——しかも、向うから働きかけてくる救済力、こちらが氣ずくと否とに拘らず、働きかけている慈悲力と

いつたらよいでしょう。

佛の本願はお經にはどういう形で表現されているか。それを見ましよう。本願は阿彌陀佛の四十八願として、淨土三部經の一つである無量壽經に詳しく説かれてあります。それは次のような物語であります。――

遠い遠い昔、數々の佛が相次いで世に出でまし給ひた後に、世自在王如來と申す佛が出興なされた。その時一人の國王があつたが、佛の説法を聞いて發心し、國を棄て王位を捨てて沙門となつて、法藏比丘といつた。大變に優れた素質の人であつた。比丘は世自在王如來の所に詣でて、「私は無上の覺りを得たいと發心しました。如來よ、如何なる修行をしたらよろしいか、どうぞお教え下さい。またどのような理想の世界、佛の淨土を建立したらよろしいか、お示し願います」と申した。そこで如來は二百十億という多くの諸佛の淨土を見せて、それらの國に住む人々の善い所、悪い所、その國々の優れた所、劣つた所などを悉く示して、「修行してどのような國でもよいから、汝の好きな世界を作るがよい」といわれた。比丘はそれから五劫という長い長い間、いかなる理想の世界、淨土を建設したならばよいかを考えぬいた末、これらの諸佛の國々の優れた點、善い所の悉くを取つて、一つの國に集め、しかも諸佛の國々のすべての優れた點、善い所を集めたものよりは、何十倍も優れた理想の世界を建てようと心に誓つた。そして再

び如來のみもとに至り、四十八ヶ條の約束を立て、これこれの淨土を建立して立派な國として莊嚴したいと誓約した。そして兆載永劫と計り知れぬほどの長い間の修行を積んで、遂に覺りを開き佛となられた。それが阿彌陀佛であり、その世界が西方極樂であり、その時の約束が阿彌陀佛の本願である。本願は四十八願あるが、その中でも第十八願は本願の中心をなすもので、王本願と呼ばれるが、その意味は「私が西方極樂世界を建立してその教主となつた時にはもし心からこの國へ生れたいと願つて、ただの一聲であらうとも、南無阿彌陀佛と唱えて私の名を呼ぶ者があるならば、必ずこの國へ救い取つてあげよう」というのである。阿彌陀佛は今、現にその西方極樂世界に在して、誓願の通りに、み名を呼ぶ衆生を攝取しておられる。――と

明らかにこれは釋尊の出家、苦行、成道、教化の一代傳歷を、菩薩の成佛國土、成就衆生という理想として、此岸的世界から彼岸的世界へ投影したものでありまして、その限りにおいて、本願の敘述は一つの物語であることを否定するわけにはいきません。如來の本願が構想された一つの物語であるなどと言えば、恐らくはいきり立つて、その不遜、烏許がましき、冒瀆を責める人は少くないでしょう。しかしその人達は次のことを再省する要があるのです。こ

ここに淨土教が現實において當面する困難であり、特に青年知識層を相手とした場合の如何とも爲し難き困難があることを。この物語をそつくりそのまま青年層や知識層に吸収させることは、殆んど絶望といつてよろしい。ニヒリズム的な生死觀がだんだんと彌漫してゆき、死に對する態度、死の受けとり方にも、虚無的な諦觀を以つてしようとする傾向が次第に強くなりつつある今日において、困難の度は一層増してきます。物語であることを指摘され批判されてもし本願の信仰が崩れるとすれば、それは誠に果敢ない唇氣樓といわなければなりません。

實は本願の説話には二つの重要な意味があるのであります。一つはこの物語が佛の大慈悲（絶對愛）の宗教的表現であるということ、もう一つは、阿彌陀佛は法身、本來の佛、佛そのものではなくて、報身、酬因感果の佛、比丘が修行をして佛とられたということであります。

まず大慈悲に對する宗教的表現であるという點から述べましょう。宗教の世界、信仰の生活は數字や科學や哲學の世界及び生活とは違います。また道德や藝術の世界及び生活とも異なります。道德は宗教との連結なしには、前回述べたように、宗教を豫想せずには、成り立ち得ないが、藝術は宗教の世界とは別にも成立し得るのです。中世は別として、近世、特に現代の藝術は神の世界を切り離されています。數學は眞理を計算によつて表わし、科學はそれを觀察

や實驗や歸納によつて、平均化して物の値打ちを抜きにして、表現します。數學や科學にとつては數字や記號があるだけでよいので、表象や形像は必要ではない。哲學も概念により論理によつて眞理を表現するので、むしろ形を用いない方が純粹であるとされています。數字や科學や哲學を基礎とする生活は、従つて、すべてを筋の通るように、合理的に、考えます。科學的な考え方からいえば、美しいとか、清いとか、善いとか有難いとか、いう考え方はないのです。すべて値打ちを抜きにするのですから、何事も當り前で、冬の次に春が來、その次に夏が來るのが一向に不思議ではありません。太陽が東から西へ進むことは自然の冷厳なる法則であるに外なりません。しかし人間の自然の見方、眞理の表現の仕方はただそれだけでしようか。太陽の熱は物理的な副射熱にすぎないでしようか。冬來りなば春遠からじと、春の暖い日射しを待ちこがれ、寒い日の太陽に何かしら限りない有難さを感じないでしようか。また雪に覆われている山々の頂を、赤く染めている殘照の美しさに、思わず見取れることはないでしようか。都會の、屋根又屋根が続いて、いらかの波が起伏する彼方に、臼すく夕方の方の太陽に、一日の勤勞を終えて歸りゆく人の尊さを、私達は連想します。こういう感じ方はいずれも科學的とは異なる別の、藝術的とか道德的とか宗教的とかいう感じ方であります。宇宙を清淨、莊嚴、慈愛尊貴として感ずることは

宗教的であります。そして辛いものは辛く、甘いものが甘いことがあるのままであると同じく、日の光が清らかに暖かいこと、宇宙が慈愛そのものであることも、ありのままの姿であります。

自然は人を包み人は自然に包まれてゆきます。この包み包まれる一大連關の姿が、よりよく共に生きようとして進み動く大生命の姿であり、そこからの働きかけこそ、本願力であり、攝取不捨の光明に外なりません。ただ人は南無阿彌陀佛の中でこの大生命に護られてそれと共に生きることができるのであります。

ところで宗教は表現の世界でありますから、この大慈悲を表現する場合、必ず何かの形像が表徴によつてこれを表現するのでありますが、その具體的な表現の仕方があつた物語の形式を取つたのであります。恰かも西方極樂世界が、無相に相を取る、姿のない所に姿を取るというのと同じであります。優れた宗教家の體驗はこうして種々な素晴らしい表現において、語られます。今、ここに満ち満ちていゝる大生命力、大慈悲は、第十八願となつて、謙虚な信心深い念佛行者に呼びかけたのであります。慧心僧都は如來の救済の體驗を表現するのに、「山越の彌陀」という形で表わしましたが、これは印度にも中國にもなかつた最も貴い表現の仕方だ僧都の深い直觀を稀にみる天才によつて初めてなされたことです。中國には唐代に善導大師が、觀經曼陀羅を澤山描いて、阿彌陀佛と西方極樂の有様を表現したと傳えられておりますし、當時の遺品と思われるものが、敦

煌の千佛洞から發掘されていゝますが山越の彌陀ほどの卓拔なる表現は曾てありませんでした。越後の良寛和尚は

焚くほどは風がもてくる落葉かな

と詠じたと傳えられ、和尚が晩年を送つた國上山の五合庵跡には、いまこの句碑が立つてゐるそうですが、相馬御風氏の研究によると、これは良寛の句ではなく、信濃の俳人一茶の句であるのを、良寛が好んで吟んでいたのかもしれないということです。もつとも一茶の句は

焚くほどは風がくれたる落葉かな

とあつて、「もてくる」が「くれたる」になつてゐますが、いずれにしろ大自然の限りなき慈愛に委せ切つた他力本願の信仰の表現であります。これは一茶が五十三才の頃の句で一風がくれたる」といふ心境は尊いもので、その頃にならないとこういう境地は達せられないのかもしれない。本願力を一茶はこんな形式で表現したのであります。また一茶の句には

雪の風呂南無阿彌陀佛と沈みけり

といふのがあります。雪の深い信濃の山奥の、寒い夜の風呂に入つて、有難さに思わす南無阿彌陀佛が出たのでしよう。なんと嬉しく微笑ましい心境でありませんか。

宗教は直觀と表現の世界であつて、本願の直觀や表現も様々であります。第十八願はそのうちの最も具體的な、切實な呼びかけであります。

なお本願の物語の意味するもう一つの點、酬因感果の佛であるといふことについては、別の機會に譲ります。



悟る心悟らぬ心

吉田 絃二郎

わたくしは三月一日の朝早く眼をさました。この二三ヶ月の間、ほとんど庭に姿を見せなかつた小壽鶏の聲を窓近く聞いたからである。庭の竹林のなかでは雉子鳩も鳴いてゐた。

「今日から狩獵が禁止されるのだ！」わたくしは眼を閉ぢたまゝ鳩の聲を聴き、小壽鶏の聲を聴いた。

二月の半ばころのことであつた。銃を持つた若者は垣根の外から、わたくしの庭の竹林に巢喰つてゐる雉子鳩を撃ち、垣根を踏み越えて、庭に落ちた鳩を引つさげて行つた。

配偶を失つたもう一羽の鳩は狂氣のやうになつて竹藪の上を飛び廻つてゐた。飛び疲れては竹のいたゞきにとまり、きよときよと、還り來ぬ鳩の行方をさぐつてゐた。その惨ましい姿はわたくしの胸を打つた。

翌日は夜半からの大雪であつた。

生き残りの雉子鳩は雪の空をかけまはつて、歸り來ぬ鳩をさがしてゐた。飛び疲れては雪の竹にとまつて悲しげに啼いてゐた。

つれあひを撃たれし鳩やけさの雪

わたくしは雪空を翔り、翔つては狂へるごとく、つれあひを探す雉子鳩をあはれに思つた。

その日からこつち、わたくしは竹藪の鳩の聲を聴くごとに胸を衝かれる思ひをした。鳩の聲を聴きつけて、ふたゝび銃を持つた男たちが近づいて來ることを恐れた。わたくしには二月二十八日の獵期の最終の日が待ち遠しかつた。

二月二十八日が來た。竹藪の鳩は鳴いてゐた。午後四時ころにわたくしは散歩から歸つて來た。雉子鳩は鳴

いてゐた。

それからわづか一時間ばかりの時が、どんなに長く思はれたことか！

竹藪の上に一つ星がまたゝき初めた時、わたくしはほつとした。この秋の獵期までは雉子鳩は安全である。

三月一日の朝小壽鷄や雉子鳩の鳴く聲を聞いた時、わたくしは「雉子鳩よ、もう、いくらでも鳴け。小壽鷄よ、いくら啼いても、もう鐵砲撃ちは來ないぞ」とつぶやいた。

しかしまたやがて來ん秋の獵期を思へばわたくしの胸はいたむ。

末世とは今の世の姿であらう。建仁寺垣を跳び越えて人の庭に入り、罪もなき可憐な鳩を撃つやうな者の横行がゆるされるとは。

それにつけても昔の殺生禁斷の時代をなつかしく想ふ。

梅の花のさかりのことであつた。

久しく顔を見せなかつたK夫人が訪ねて來た。K夫人の名を假りに瀧子と呼ぼう。瀧子は娘時代から誰れにも可愛がられる素質を持つてゐた。

かの女の結婚披露式は某々伯子爵等を交へて、帝國ホテルで花々しく舉げられ、幸福な明日の家庭生活が約束せられてゐた。

瀧子は二人の子を儲けたが、主人は間もなく南方の戦線に驅り立てられ戦死した。

瀧子は二人の幼兒をかゝへ爆彈に家を焼かれ、残つた地所も家財も賣り盡し、今は封筒などをはつて生活をつゞけてゐる。

昔のはなやかなかの女の生活を知つた人たちはかの女の現在の生活を見ては泣かされる。

だが、かの女は昔の娘時代の朗かさを失つてゐない。

かの女の長男はことし尋常二年であるが、父を戦さに失つた悲しみは幼い心にも犇々と感じられるのであらう。瀧子の膝に抱かれながら、

「僕はどんなことがあつても戦さには行かないよ。僕は死刑になつても戦さには行かないよ。母さん」と言ふ。

それに、長男は病弱であり、瀧子は四十五日が間、自分の輸血を以つて瀕死の床から病兒を救つた。十五貫のかの女は九貫五百まで瘦せた。

しかしかの女は天性の朗かさを失はなかつた。

かの女はわたくしにかう語つた。

「あたしの昔を御存じの方は、あたしが袋はりをしてゐる姿を見て、涙を流して氣の毒がつて下さることもありまゝす。しかしあたしは袋をはつてゐる間こそ一番仕合せなのです。紙の袋をはるのには手先きだけを機械的にはたらかすればいいのです。ですから、袋をはつてゐる間あたしの頭は自由な空想を働かすことができるのです。

あたしは過去の幸福だつた日を頭いつばいに描き出すことができます。たとへば芳野の花を見に行つたことを懐ひ出して袋をはつてゐます。保津川を舟で下つた春のこととを思ひながら、袋をはつてゐます。無限に遠い昔のなつかしい美しい思ひ出が湧いて來ます。だから袋はりの手を動かしてゐるをりくらゐ、幸福な時間はないのです。今の境遇をあたしは少しも悲觀してはゐません」

と瀧子は昔の娘時代の朗かさを美しい顔に見せてゐた。

瀧子の話はわたくしに鷗外の「高瀬舟」の流人の話を思ひ出させた。一筋の薬に刺した青錢を算へて幸福を見出してゐる流人の悟りは尊いものであつた。

瀧子の悟りも尊い。瀧子はキティ颱風の夜の經驗を語つてゐた。

一姉夫婦とその子供たちは二階の北側の部屋にやすんでゐました。わたしは二人の子供といつしよに南側の部屋

にやすんでゐました。風は南でしたから、わたしたちの部屋の方が揺れることはとてもひどかつたのです。姉の子供たちは恐い恐いといつて泣き叫ぶのです。ところが年下のわたしの子供たちはわたしに獅噛みついたまゝすこしも泣きません。たゞ一度長男がいひました。(お母さん、お母さんといつしよに死ぬと思へば颱風なんか恐くないやね) ツて。子供でも運命のどん底に追ひつめられれば悟りを見つけるんですね」

かの女は明るい顔をして語つた。

たけのこ生活についても瀧子は語つた。

「最初は一本の帯を賣るにも未練がありました。後には(この着物があつたればこそ、今日も救はれた)と感謝して手放すことができるやうになりました」こゝにも一つの悟りはある。

「いつか銀座のえり圓の飾窓の前に立つて昔さながらの派手な帯に見惚れてから、不圖現在の自分の姿に氣付いて涙を落したこともありました」と笑つた。瀧子の悟りやらぬ心もありがたい。

かの女は、わたくしの底の紅梅をかゝへて歸つて行つた。



明日は花まつり

高橋良和

村はずれの森のまめ狸たぬきはやぶのかげからすがたをあらわしました。

あたりにはひと通りがなく、しーんと静かな森のなかは夕方のようなうすくらがりでした。

「誰もいないかな。よーしそれではひとつ化けてやろう。」
まめ狸はあたりのけはいをのぞきみながら、こそこそとくさむらのなかにもぐると、親狸おやたぬきからおしえてもらつたと云う特別のとなえごとを口のなかで、ムニヤムニヤ、ボソボソプイプイと云うと、たちまちまめ狸のすがたから可愛かわい、人間の子供にかかりました。

「これでよい、これで誰も人間の子供と思うだろう、誰かこないかな、いつしよに遊ぶのに。」

まめ狸はくさむらをあちこちと、とびまわつて人間に化けられたうれしさで、タンタンタラタラタンタンと歌をうたいながらたのしそうにあそんでいました。

あたりはのどな春の景色で森の木の間を通してあぜ道に

咲く春の花の赤や黄色がちらほらみえています。

「きれいだな、誰かくるといいのに。」

ひとりごとのようにささやくと、とつぜん森のなかの一ぼん道をこちらへやつてくる子供があります。

まめ狸はさつそく、きり株のうしろにかくれて様子ようすをみてみると、その子供はボロボロの服をきて、片方にきれたわらぞうりをさげて、はだしでやつてきます。

まめ狸はこの子供をみると、これでも人間かなと思うくらいでした。

その子供はいたそうな足をひきずりながら、やーつと森のなかにやつてくると、まめ狸がかくれているきり株のところにとつかりと腰をおろしました。そしてため息をついたように、

「あー、淋しいな、一人ぼっちつて。」

と、つぶやきました。

まめ狸はこれきくと、

「一人ぼつちで、なんだい、僕と同じだな、一緒にあそんでやろうか。」

と、考えました。

それできり株に腰をかけている子供のうしろから、くらくらいつくように「ワアッ」と大きな聲をかけました。

「誰だい、びつくりさすのは」

子供はおどろいてとびあがりました。

「僕だよ。」

「なに——誰だつて。」

子供はきよろきよろあたりをみながら自分の目の下にいる變な子供狸のすがたをみつけました。

「君かい、ワアッと云つたのは。」

「そうだよ、君一人ぼつちつて云つたね。」

「うん一人ぼつちなんだよ。君は。」

「ぼくだつて一人ぼつちなんだ。」

「ふうーん。」

「君、なんと云う名前なの。」

子供はまめ狸の化けた子供にこうききました。

するとまめ狸の子供は、目をきよろきよろさせながら、

「そうだね、ぼく、ぼく、こんな子供のかつこうをして

いるけれどほんとうはまめ狸なんだ。」

と、だいたんにこたえました。

「え、まめ狸つて。おどろいたよ、ぼくは乞食なんだ、

家や、お父さんや、お母さんのない子供なんだ、名前には正太郎つて云うよ。」

まめ狸はその子供が正太郎と云う乞食であると、わかると、やれやれと思つたのでしよう。

「そうか、僕はこの森のなかで何年も前から住んでいたが、お父さんが月夜に網にかかつてとられてから一人ぼつちでいるんだ。」

「淋しいね、君が一人ぼつちならぼくと友だちになつてあそぼうか。」

正太郎は今まで一人でいたことの淋しさを思いだしながらこう云いました。

「うん、あそぼう、ぼくいつもこの森にいるから、あそびにきてくれるね。」

「ぼくなんか家がないんだもの、いつだつてやつてくるよ。」

正太郎とまめ狸はすぐ仲よしになりました。

二人は森のなかをあつちへ行つたりこつちへ行つたりしながらとびまわつて仲よくあそびました。

春風は土くさいにおいをもつて、正太郎とまめ狸のほほをなぜながら通つていきます。

とつぜん、正太郎は聲をあげました。

「おい、きたよ、みてごらん、向うから。」

正太郎が指さした方をみると、誰かがやつきてます。

「おや、あれは誰だい。」

まめ狸は目をみはつてききかえしました。

「まつてるんだよ、ぼくがみてあげるから。」

正太郎は背のびしながら、じつとみると、それは一人の和尚さんでした。

「なーんだい、和尚さんか、あのね和尚さんだけれど、

君はかくれていなくちやだめだよ、早く、早く。」

こう云うとまめ狸はくさむらのなかをつたつて、向うにからだをかくしました。

正太郎はしらん顔をして、ひよつこり森のなかにやつてきたようにうろうろしていると、さつきの和尚さんがいそぎ足でその横を通りすぎようとして、ふと正太郎をみつめました。

上から下へちろちろとみると、さもふしぎそうに首をかしげながら、

「お前さんは誰じやな」

と、ききました。

「ぼく——、ぼく正太郎つて云うの。」

「正太郎つて、ふうん、この村できいたことのない名前だが、どこから来たのかい。」

「どこからつて、別にどこからと云うわけではないが、

家もなにもないんだよ。」

あつさりそう云うと、正太郎は、あいそうのない目つき

で和尚さんをにらみつけました。

「まあそうにらみつけるな、家のない子か、わしはな、

この近くの正源寺（しょうげんじ）の和尚じや、どうじや、お前はお家がないと云つたが、一つわしと一緒に寺へきて、くらさぬか。」

「え、お寺つて……こわいな。」

「なにがこわいことあるかい、たくさんの子供が毎日あそびにきて、そりやにぎやかだよ。」

正源寺の和尚さんは、すつかりうちとけて正太郎にはなしました。

「それに、お前は家がないくらいだからきつと一人ぼつちだろう、わしがお父さんになつてやる。」

「お父さんに。」

正太郎はお父さんのことばをきくと、たまらなくなつかしいものがこみあげてくるのか、しずかに目をつむつてしましました。

「どうじや正源寺の子供にならんか、それにあしたは年に一度のお寺の花まつりじや、なあ、一緒にたのしくお祝しようよ。おいで、おいで。」

正源寺の和尚さんのこのことばをきくと、正太郎はたまりかねて、和尚さんの衣の袖をしつかりにぎりしめると、

「僕でも、正源寺の子供にしてくれる。」
と、力を入れてききかえしました。

「あたり前さ、正源寺の和尚さんは嘘を云わんからな。」
 「和尚さんありがとう、ぼく行くよ。」

「くるか、それでよい……。」

和尚さんは、正太郎の肩をだきかかえるように両手でいたわりながら、

「今まで淋しかつたろう。」

と、まるで赤ん坊をあやすように肩を二つ三つたたいてくれました。正太郎はしばらく和尚さんにいたわられていると、とたん、大きなこえをしたかと思うと、

「和尚さん、ぼく一人お別れする人があるんだよ。」

「え、お別れする人つて、それはどこにいるんじや。」

和尚さんは正太郎が友だちでもあると思つてあたりをみました。すると正太郎は聲をあげたかと思うと、

「まめ狸や、俺はな、これから正源寺へ行つてくるよ、

そして今日から正源寺の子供になるからな、お前との約束通り毎日遊びにくるよ——。」

と、さつきのまめ狸にきこえるように叫びました。

正源寺の和尚さんはこれをきくと驚いて、

「まめ狸つて……あッはッはッ……昔からこの森によく狸がでるとのことだが、狸に約束しているのか、もうよい、さあ、行こう、行こう。」

と、云いながら正太郎の手をひきますと、正太郎はどこかできいているまめ狸にこれだけを云うと、和尚さんのあとについてあぜ道づたいに正源寺の方へいそいで行きました。

和尚さんと正太郎のすがたが、だんだん向うに遠ざかつて行くと、かくれていたまめ狸はくさむらからそーッと顔をだしました。

そしてのびあがるように和尚さんと正太郎のうしろすがたをみると、

「人間つていいな、俺にはあんな親切な人がない、こんなに人間に化けたつて、やつぱり狸は狸だ、正源寺の和尚さんつて親切な方だな、あしたは花まつりつて云つたな、よーし俺だつてあしたこの子供のすがたで仲間に入れてもらおう。」

と、ひとりごとを云うと、今度は大きな聲をはりあげて「正太郎よ——これから毎日この森にあそびにこいよ、まつてるよ、それからあしたの花まつりに、おそなえものをもつて行くよ。」

と、叫びました。

しずかな森のなかにまめ狸の聲がこだまする頃は正太道のすがたは正源寺の門のなかにきえていました。

「うらやましいな、そうだ、俺はこれからあしたの花まつりのおそなえをさがそう。」

子供に化けた狸は、ムニヤムニヤボソボソブイブイと云うと、またもとの狸にかわりました。そして深い森の奥の方へ木の實でもひろいに行くのか、一目散にすがたを消してしまいました。

森のなかには夕陽がおちたせい、うすぐらくなつて正源寺の鐘がしずかになりひびいてきました。

明日は花まつりだそうです。

祝福された

人生へ



—ある母への御返事—

早見君子

四五月までは婚禮シーズンとでも申しませうか、町を歩いて居りましても美しい花嫁さんをよく見かけます。たしかにお手紙にある様に年頃の娘さんを持たれるお母様方からは現代の婚禮式のあらかたなどについてよく相談を受けますからいまの結婚式についての私の考へを少々述べて御参考にもと存じます。

形の上からも思想的にも終戦後非常に變化した今日ですから何も文金高島田の振袖姿が花嫁の最高點でもあるまいという人もあります。又豪華な結婚式などしても仲のよくない不幸な主婦もあるし、簡単に寄り合ひの同居的夫婦でも實にすばらしい生活もある。要するに結婚式だの披露宴なんか古いよと、いう人もありませう。誠に御尤もな事でさういう人はそれで結構なんです。べつに法律ではないんですから。然し人には各々夢があり人間の生活にはくぎりといふものがあります。少しでも美しい夢を持つ可憐な眞面目なお嬢さんにとつては、世の中がどんな形に変わろうとも結婚は新生活への大切なスタートです。若

い男女が夫婦といふものになつて、始めて創り出す我家の歴史の第一ページは、日本古來の形式から出發して自然の生活にはいるだんどりは引きしまつていゝと思ひます。新家庭の寫眞帳のトビラは新婚の父母の姿で始まるといふ子孫への親しい教育の料ともなりま

式服のさまざま

花嫁姿にもいろいろあります。高島田は模様の振袖帶付といふのが最も普通なねらひでせう。振袖にも白無垢のうちかけもあり、又同じうちかけでも色を少しも使はない古風な衣装で純白一しきのものもあります。この外止袖の黒紋付、訪問着に袋帯などの輕装、或は無地物の紋付でも結構です。

式服の手入

式服の新調などは實にばかばかしい事で

す。一度だけの衣裝に數萬金を投ずるのはつまらない事ですから、どんな身柄の方でも殆ど借物といふ事が近頃の通念です。勿論はづかしい事ありません。近くはお姉様か親せきかお友達方面か、兎に角身近な人からお借りするのです。お母様やお祖母様の時の式服でも結構です。古ければ古いなりにクラシックなお作りの仕方があつて、却て現代娘にしたりとしてみた情趣を出します。どうしても身よりにならない場合は止むを得ず、貸衣裝店から借りる事です。相當お高いでせうからまづ身近をたづねる事に致しませう。あげぼうし(角かくし)とは、こせこは unnecessary です。普通の紙入を一寸はさむ方がスマートです。それも無ければお懷紙を少し見せただけで結構です。

式場と披露

式場及び披露場は出来れば家庭でなさるのが一番ですが、家もせまく人手もないとあれば、おとつぎ先と相談の上、神式、佛式、教會いづれにせよ手はかかりません。婚禮を披露

ふデパート其他では衣裝一さいを含め、美容から寫眞から簡単な御披露まで一寸の時間で出来ます。番號順でやるのです。つまり日常着で飛び込めば、何もかもしてくれて、また元の日常着で出て来る仕組なんです。然しこれがいゝかわるいか、好きか嫌ひかの御返事だけは許して下さい。御披露はせまければ招待を少なくしても御家庭で心のこもつた手料理でなさる人が随分多くなりました。これは却てゼイタクかもしれないませんが、主も客も心を開いて温かい情合がゆき渡つておめでたいと思ひます。美々とした宴會場で形式的な冷えたお料理を頂くより、牛鍋でもお家と私は思ひます。

以上申上げた事はほんの普通の事柄だけで婚禮の入口でしかありません。第一お嫁さんと美容についても何も申してゐません。要は、形式と申しても豪華をさけて出来るだけ簡単に清楚に、しかも莊重に、個性的な意義を含めたあらはしかたでありたい。髪は自製の洋髪でも、着物は有り合せの小紋でもお召でも

そんな事は第二義的なものです。只心持だけは正しく新らしく、御両親なり御兄弟なりで式を擧げるだけでも、決して式に變りはないのです。身柄に相應しい、無理のない程度の方が先の永い二人の前途には、眞面目な意義を持つ新婚のスタートと申されませう。然しどんなに親交の深い御當人の間柄でもどんなに進行した愛人同志でも、同棲の前には結婚の式だけはあげて頂いて前途の明るさを祝したいと思ふのは私の持論なのでございます。

新しき人生

うつくしみいとほしみつゝ眞清水のあひ寄りむすぶ光りたのまむ
この里の柳芽をふくあさぼらけゆたかに
水もあふれてぞゆく
翅をふく風にも春のいろみえて鶴のめを
との歩みゆたけき

祐天上人の話

藤 田 寛 雅

四月八日

花祭り、という言葉は、春にふさわしいだけでなく、何か生き生きとした喜びを心に湧きおこさせてまいります。お釋迦さまの誕生日とおもいますと、それだけですすがうれしい心になつてまいります。

昔のすぐれた方たちをお偲びいたしますにも、この國では故人を偲ぶのに多くその忌日をとつていたしますが、——之も人情の自然でございませう、——誕生の日をとつて記念しますことは、喜びが自らにこもつて明るく、好いものだとおもいます。西洋では、この誕生日の祝福といった方が重んじられているように、聞いて居ります。

四月八日の花祭りは申すまでもないことですが、法然上人は四月七日のお誕生、これも皆さんは御存知と思ひます。ところで、淨土宗にとりまして、江戸の半頃にその名徳を慕われました祐天上人が四月八日の誕生で、四月に關聯して、少しく祐天上人のお話を申してみませう。

徳川の天下も漸く泰平えの道が定まつてきました三代家光の時、寛永十四年の四月八日、奇しくもお釋迦さまと同じ日に、福島の一農村、いまは大浦村字仁井田と申しますが、當時の新倉村の農家に、上人は生れました。このまゝでしたら、東北の一農村に三之助と呼ぶ一人の農民が成長したに過ぎなかつたでせう。

九歳の時に芝増上寺山内の池徳院に住していた伯父の休波和尚のもとに、この少年は出てきました。當時學僧として名高かつた袋谷の檀通上人の門に入つて、得度しましたのが十二歳、後の祐天上人の道がこゝから始まつたのです。しかし多くの名僧學僧として知られている人たちの傳記をみますと、幼にして案に秀で、とか、梅檀は双葉より香しなど、殆ど全てがそうしたことを傳えて居りますのに反して、祐天上人の出家者としての出發點は、全く逆に、經文の一字一句を容易に覺えることも出来ない、まことに驚くばかりの鈍才として傳えられています。勿論、鈍い足どりがそのまゝで偉人生む筈はありません。どこかに轉回があります。祐天上人にも、それがありませんが——そのことはいづれ別の機會に申しませう——

しかし、その間を通じて後世の私どもが理解できるところは、驚くばかりの不屈の意志と申しますか、努力の連続があつたように感じられます。従つてまたそれは信仰の道においての苦闘の連続でした。そして更に申しまするならば、その苦闘の半生が、上人をどのような成長させて行つたかを考えますときに、上人が當代に抜んでた學僧、という面よりも、民衆にすぎりよられる溫いものを上人にふかく感じるのです。私は學僧としての上人よりも、民衆にとりまかれ念佛とともに生きた上人を慕わしく思ひます。

戀のしがらみ

「花さそふ蝶は霞の野べをまつ、日かげの木々は花をまつ、人は情の夜すがらの——」

新内節に「藤葛戀のしがらみ」というのがあります。新内——申しても今では御存知の方は極めて少ないことでせうが——明鳥とか、蘭蝶とか、が有名なものとしてすぐ想ひ起されませうが、この「戀のしがらみ」もお定まりの筋のものなのです。今さら唐突として、新内の話などとお考えでせうが、實は、最近、他の必要から江戸市井の人々に愛唱されていた俗曲類を讀んで居ります中に、この新内で祐天上人の姿を感じたからなのです。

今では新内などは、もう歴史の中に没してしまつたようなものですが、江戸から明治の頃にかけて、その哀音悲調はほのぐらい蘭燈のかげに流れて、きく人々の胸に、斷腸の想ひをかきたてた、と申します。その曲節の哀切なことゝいゝ、その歌はれる内容が、紅燈

の巷に人生の憂悶をふかめる人々の姿を、殊にとりあげただけに、歡樂のかげにひそむ哀傷をつよく感ぜしめたものであります。江戸も末ですが、文化の頃から明治になる迄、江戸吉原では廓の中に、新内に入るのを禁じたということですが、それというのも、新内に魅せられて、若い生命をすてる男女が少なくなかつたからだ、と申します。通俗と言へば通俗でせうが、江戸の人たちにとつて、新内が大いに愛唱されたことは、言ふまでもありません。

「戀のしがらみ」は早衣と喜之助の情死を扱つたものですが、女は申すまでもなく、儘ならぬ浮川竹の勤めの身、男はまた親女房や友人などの義理と意見にせめられ、とゞのつまりが「この世はゆめの假の宿、未來は同じ蓮華の座」というわけです。そこでこの二人が思ひ決した最後の場で、この新内はこんな言葉を語らせています。

非業の死のつみとがを、ゑんまさんが叱るなら詫言をしてください、さんせ、祐天さんや釋迦さんのよもや見すてはさんすまい、なむ釋迦如來、祐天様、助けて給へ、南無阿彌陀佛、

想えばこうした俗曲の中に、そして遊女の言葉に現われてくる祐天上人は、江戸の人たちにとつて、身近かな救ひの光であつたことを感じさせます。この「戀のしがらみ」は、鶴賀新内直傳といゝますから、江戸も爛熟した明和安永の頃の作でせう。してみれば、祐天上人が亡くなられましたのは、享保三年、ですから、この新内が新作されたのはそれから凡そ四十年ほどたつていますが、上人はこうした世界の人たちの中にまで、はつきりと生きて居られたということが出来ます。

そして、祐天上人、助け給へということは、その頃の人たちにとつては、南無阿彌陀佛、というのと同じほどの意味をもつていたと思ひます。死に限りません、病にも、何か行きつまり苦惱する心は、祐天上人にすがりよつて行つたにちがいありません。人生行路難といゝますが、人々はそうしたさまざまな人生に蔽ひかゝつてくる災厄を逃れようとするとき、祐天上人を念じ、祐天上人を呼んだのです。上人のお名號について、多くの傳記などで傳えるところでは、それが火難、水難、劍難、などの災厄を除くお守りと尊ばれていることも、そして、上人のお名號を、我も我もと授けて頂くことを望んだのも、上人が力なき民衆の心の綱であつたことを物語つて居ります。

焼けずの名號

元祿三年、といへば上人は五十四歳、江戸の牛島に小菴を結んで居られました。花の季節には風の多い日がつゞきますが、淺草から起つた或る夜の火事は、またゞ間に火足が延びて、隅田川を越えて向島一帯を焼いてゆきました。上人の菴もこの春の夜の火に一たまりもなく焼けてしまつたのですが、まだあちこちに餘燼がたちのぼり、火事場の臭があたり一杯にたちこめる中で、焼け出された人たちが右往左往しています。

小菴の焼跡あたりで無心に子供があたりをかき廻して惡戯をしてゐるのを、通りかゝつた松平家の家中の者がふとみると端の焦げた紙を子供がかき出しています。祐天上人のお名號なのです。墨色は歴然として少しも損じて居りません。世に名高い上人のお名號とて

早速貰ひ受けて、知人の下谷池ノ端の高梨清兵衛に表装をたのみました。之が「焼けずの名號」と世に知られるに至りました。その後祐天寺に納められ、いまに傳わつて居ります。

祐天上人のお名號には、こうした靈驗譚が數多く傳えられて居ります。祐天上人が稱名念佛をもつて多くの人たちを救はれたことは例へば芝居で有名な「累」の亡靈を得脱せしめられたことなどをはじめ、多くの奇端をもつて語られて居ります。靈驗奇瑞、と申しますと、あるいは何か科學的でないとか、反合理的に頭からきめてしまふ人がありますが、靈驗の有無は、ひとえに佛心の自らに然らしめるところであつて、私たちが自らの立場で一概にあげつらうことではなからうと存じております。

上人は十數年の間、毎夜、一本の蠟燭をともして、それが燃えつきるまでの間を、必ずお名號を書寫され、その數は三十餘萬枚に及んだと申します。お名號を授けられることは、とりも直さず、お念佛を勧められることであります。幾千、幾萬の人たちが、祐天上人のお名號を日々の生活に仰いで、人生に光明を得ていつたことを私は深く感じます。その人たちは、お名號を仰ぎ、お念佛の生活にあることによつて、災厄にあつても、徒らにまどひあわてふためくこともなかつたであります。丁度、焦土の中にお名號が歴然としていたように、人生の苦難の中に、お念佛の生活、そのみが動かない力を示したことでせう。祐天上人は、人々にそうした生活の、人生の生き方を示されたのでありますが、いづれまた詳しいお話は申し上げます。

限りなき光に照らされて

—— 第四講 ——

文學博士 大野 法道

聞名得益偈

其佛本願力 聞名欲往生

皆悉到彼國 自致不退轉

御經を讀み終つたならば、つぎに此偈を唱へる。この偈は、つまり御經を結ぶ言葉で、全體として、阿彌陀佛を讀へよろこぶ心を顯はすものである。訓讀みにすると、

其佛本願の力、名を聞いて往生せんと欲せば、皆悉く彼の國に到つて、自づから不退轉にいたるとなる。

一、佛の本願

淨土の道が、阿彌陀佛の信仰に立つことは言ふまでもない。その

佛が衆生に直接の力であるのは、本願の佛だからである。

まことに衆生の日目の、雜念に終始する生活をそのまゝに、絶對界である佛のみ國に直結することのできるのは、たゞこの佛の本願に依るのであるから、自己の心の徹底的な處理を求める時、何よりも之なしには生きられぬものこそ、佛の本願だからである。

言葉では佛の本願といふが、實は本願が佛體である。まづ佛があつて而して後に本願ができたのではない。そのことは委しく無量壽經の上卷に説かれるとおりであつて、阿彌陀佛は成佛の前に、衆生と絶對界を直結する道として、念佛を人の世に開き出す願ひ、それ

を中心とする種々の願ひ、すべて四十八願を選びたまひ、それが菩薩行の努力の裏づけによつて實を結んで、阿彌陀佛の出現となつたのであつて、それらの願ひは佛のいのちであるから、之を本願といふのである。勤行の終りのところで、「本願成就身、阿彌陀佛」と唱へるやうに、本願の成就が即ち阿彌陀佛である。

法然上人は、このころを一層深くつき込んで、六字の名號即佛體とまで申された。その代表作である選擇集の第三章に、佛德のあらゆる功德は名號に含まれている、とあるのがそれである。實に衆生とまさにあるべき世界とを直結する、眞實一路に佛のいのちを見ることは、いみじく本願の玄意に直入して、そこに絶大の力を感得した境地であるであらう。

二、み名を聞き知る

第二、三句は、「名を聞いて往生せんと欲せば、皆悉く彼の國に到つて」である。之は佛の御名を聞いて淨土のことを知り、そこに生れやうといふ心が起されば、念佛して命終れば、悉くかの御國に生れる、といふ淨土門の信仰を要約した言葉である。

この信仰が、實際の事實として運用されるのは、生れやうといふ心、つきつめて言へば、淨土をよろこぶ心、愛好する心を本とする。もしこの心がなかつたら、佛の御名がいかに尊くとも、淨土がいかにかにうるはしくとも、すべて人間とはかけ離れた、一つの觀念に

終つてしまふ。

そこで問題になるのは、生れやうとする心はどこにあるか、どうしたら起きるかであるが、之は衆生各自の魂の問題であり、すべて心の奥底から湧きあがるものであるから、一つの型にはめるわけにはいかぬ。機縁としては、目に見たり耳に聞いたりする、數限りない事から起ることもあるであらう。可愛い子に先立たれたり、愛人に死なれたりして、悲しみのどん底にたゞきつけられた心の更生もあるであらう。またそうした特別の非常の事からでなく、平凡に日を暮す中に、すなをに本心に立ち歸り、今自らの住む世界を見てそのまさにあるべき最後のものを、ひそかに心の奥ふかく懷くこともあるであらう。いづれにしても、シュウベルトの口吻を以て言へば、凡そ人々に、現境に止まらぬ心の終らざる如く、この心も亦終らざるべしである。

三、不退轉の世界

第四句は「おのづから不退轉にいたる」である。之は淨土が、進んで止まぬ不退轉の世界である喜びを説くのである。

我々が今住んでゐる世界は、行きつ戻りつであつて、誰しも望むところの進歩は、容易にはかどらない。何事によらず退屈や、退歩や、轉落などがなく、進みの一途をゆくことができたなら、これ程嬉しい事はないのであるけれども、人の世は豫期せぬ意外な邪魔物

が顯はれて、物事の成功をはばまうとする。それも外から來るばかりでなく、自分自身が進む途中で、嫌氣がさしたり、思ひ返したりして、立ちどまる事もある。甚だしいのは、口に平和を叫んでゐながら、手では、人類を一舉にせん滅する、大變な爆彈を造つたりする。一方に人々の自覺、反省、研究、鍊磨の生活で、人の世の幸福が廣くなればなるだけ、新らしい不幸が登場してくるのが、まぎれもない現實である。

照 益 文

光明 遍照 十方世界

念佛衆生 攝取不捨

一、光りは萬物の上に

之は觀無量壽經に出る重要な經文の一節で、佛の光明は一切の世界に照つてゐる。念佛すれば、その不捨の光りを身に受ける。と説かれるのである。前の句は「光明遍ねく十方の世界を照して」と讀む。

明るい光りが人々にとつて、いかに望ましいものであるかは言ふまでもない。朝起きて旭のひかり麗らかに、今日の好き日を、約束してくれる嬉しさは喻へやうもなく、夜ともなれば、大袈裟に言ふ

淨土が不退轉の世界であるといふのを、この人の世に於て味はつてみれば、一切の退轉の彼方に行くことであらう。何物にもたじろがず、所期の目的に向つて初一念を貫く、金剛不壞に生きること、思ふ。しかし、いかにそうした決意で進んでも、それからそれと湧いてくる邪魔に惱まざるを得ないのであるから、淨土は我々の、永遠の憧れの的であらねばならぬ。

と人間の運命は全く明るい光にかゝつてゐる。そうした物理的な光だけではない。

この頃ラジオで、「光を掲げた人々」といふ放送を、日曜日ごとにやつてゐる通り、人の世の生活を便利にしたり、心持ちを明るくしたり、人々を幸福にしたりする仕事は、たしかに人間が掲げる光りである。但しラジオが出してくるそれらの顔ぶれは、殆んどすべてが、西洋人かキリスト教關係であるのは片寄つてゐる。もつと視野を廣く大きくせなければ、せつかくの掲げる光りがにぶくなる。

更に、立派な仕事をした人だけが、光りをかゝげるものではない

い。人間が感ずる明るい気持ちには、悉くその時に対象となつた物や人の光からくる。こちらに感受の装置が整つて居れば、隨時隨處に光りに出遇ふことができるであらう。

人間の本心が、求めてやまぬ明るい生活は、光明遍照といふ限りなき光の、信仰の中に生きることによつて、一層大きく、感受の心はその眼を開くことであらう。

二、不捨の光

照益文の後の句は、「念佛の衆生を攝取して捨てたまはず」で、あらゆる物を照らしたまふ佛の光りを、まさしく身に受けるのは、念佛する人であると説かれるのである。

明るい心は、人間の幸福の泉であるが、ひやゝかな現實は、惜しみなくそれを奪はうとする。世界の歴史を顧みれば、廻り燈籠の繪のやうに、めまぐるしく移り變る、過渡時代の連續である。殊に現代は、二度の世界戦争を経て、第三次のそれが起きない事を、何人が保證し得よう。人々が本心に希求する永遠の平和は、遂に此世に來ないのであらうか。こう考へると、明るい心の本綱が断ちきれたやうで、知らずしらず暗い影が、心を一面に覆ふてしまふ。

かくて人の世は、全く絶望の淵に蹴落されたやうであるが、世界の情勢はどうあらうとも、人々の心の動きは何であらうとも、求める心の盡きないかぎり、光りは必らず人々の身に具はつてゐる。か

れらのまさにあるべき世界は、佛によつて成就されてゐる。人生「望みなきにあらず」といふやうな、斜面的な言ひ方でなく、「望みあり」と眞向から、決定する自信に立つものが淨土門である。

こうした自信を以て、一切の處を隈なく照らして、どこまでも明るく生かしめたまふ、佛の光りを、身に受けた生活事實が念佛であるから、その人には攝取不捨の光りに照らされる喜びがある。

「不捨」の光りを自覺する、より以上の明るい、心の本となるものが、この人の世にあるであらうか。

この光明遍照のこゝろを、法然上人は歌にして

光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨のこゝろを

月影のいたらぬさとはなけれども

なかむる人のこゝろにそすむ

とお詠みになつたばかりでなく、上人が此世を去りたまふ時には、この經文をかすかに唱へてゐられたとも傳へられる。まことに尊い極みである。

法然上人法語

いま極樂をもとめん人は、本願の念佛を行じて、攝取のひかりに照らされんとおぼしめすべし。これにつけても念佛の大切に候よくよく申させ給ふべし

——大胡太郎實秀が妻室につかはす御返事より——

◆新入會申込の方々に◆

法然上人續仰會は、申込によつて何時からでも、誰でも入會し、月刊信仰雜誌「淨土」の配布をうけることができます。

◆本會は、淨土宗祖法然上人が示された念佛信仰をいまの生活の中にふかめてゆくとともに、更にひろく社會に正しい信仰をたかめてゆくために結ばれたものです。

◆會の目的をたゆまず達してゆくために、毎月「淨土」を刊行し、會員に配布し既に十六年に及んでいます。世間の出版界が洗滌の姿を辿つてゐる戰時、戰後を通じて、「淨土」はつねに着實に歩んできております。淨土の歩みはとりもなおさず、正しい信仰に生き抜いてゆく會友の方々の歩みに他なりません。

◆その他、本會では眞に心の伴侶となる圖書の刊行頒布、講演會、座談會などの事業を行うとともに、多くの人々と廣く手を携えてゆく上から、會員の申込によつて講師の紹介派遣もいたします。

◆會員となるには、半年一三八圓または一年二七六圓を添えて申込まれる他には別に手續を必要といたしません。申込には振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

◆會員は淨土に投稿することができます。但し採否は編集部にお任せ願います。

芝園だより

◇春や春、など、言つては居れない時世がまだつゞく。しかしどんなに苦しくとも一步より一步へ。明るい光をみつめてゆく。その歩みにとつて、吉田先生の「悟不悟の心」山本博士の「佛道身邊」は感銘ふかい。博士は宗祖への深き歸信から本宗門に入られたことは御存知でせう。山陰の地から遙か玉稿を頂けたことを喜びます。

◇讀後、心に残るものを持つてゐる珍しい雜誌と未知の方が、わざわざお便り下さいました。小さくとも一つの光でありたいと念願します。その意味で家庭でよむ淨土子供のために一頁でも、と大分要望が多いので、今月は京都の高橋氏から童話を頂きました。氏は清新な佛教童話「おしやかさま」を近刊され、文藝童話作家として知られた方です。

◇勤行講讀はあと暫らくで完結しますが、新しい連載企劃の上に、

皆さんはどのようなものを望まれるか、會友の聲をどしどし寄せて下さい急テンポで新會友の参加がつづいていきます。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿五年三月二十五日印刷
昭和廿五年四月五日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田錦保町三ノハ

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人續仰會

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

學生募集

第一學年 三〇〇名
第二・三年 若干名

文學部(哲學・史學・文學科)

佛教學部(佛教學・梵文學・宗學)

旧制中學卒業者には資格認定の道あり

各科補欠若干募集中

大正大學

大正大學高等學校(夜間)

普通科・宗教科各學年補欠募集中

入學案内は二〇圓及び封筒(切手財布)を添えて申込の
(宛名記入)こと

東京都豊島區西巢鴨四丁目

都電・バス西巢鴨下車

淨土トラクト續刊豫告

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價——淨土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられ、續刊の要望が多いので、次のような企劃で順次に新刊いたします何卒御期待下さい。

お十夜の話

藤田寛雅著

四圓送六圓
既刊賣切

お彼岸の話

竹中信常著

五圓送六圓

お念佛の話

佐藤賢順著

近刊

お盆とおせがき

近刊

先祖とお墓の話

近刊

その他、續刊企劃中

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會